事例報告

F 科目（導入）初年度の試み

全学共通科目総合系科目では、2022 年度より F 科目（外国語による総合系科目）のなかに導入レベルを新設しました。

F 科目（導入）は、1 年次生が入学後の春学期（導入期）に履修することを前提とした「学びの精神」科目として開講し、大学での学びを理解させるとともに、日本人学生のグローバル環境に身を置く意識を高めることを目的としています。英語教材等を使用しますが、授業は主に日本語で行われるため、学生が英語「で」学ぶことを体験し、英語教材への抵抗感を和らげることが期待されます。

初年度の F 科目（導入）を担当された先生方に、実際の授業運営方法や工夫、課題などについて伺いました。

報告者：
「法と政治の世界」　高橋 和則（全学共通カリキュラム運営センター兼任講師）
「Image Studies」　滝浪 佑紀（現代心理学部准教授）

1. ご担当科目の概要について教えてください。

高橋：2022 年度に F 科目（導入）の「法と政治の世界」を担当しました。実は F 科目（導入）がスタートする以前から、何度か「法と政治の世界」を担当させていただいています。この科目は、新入生に大学の授業に慣れてもらいつつ、法学部生以外に法や政治の基礎知識を伝達することを目的としています。これらの知識は、今後社会人となった際に一般教養として必要になるもので、学部が違ってもこうした知識に関してあまり個人差があってはいけないように思います。しかし、これが意外に難しく、半期の授業でどういった内容にすればよいのか悩みました。というのも、当然ながらある程度の話のまとまりが必要で、かつ（政治的な知識を持ってないことを前提としているものの）学生が一から十まで知らないことでも困ると思ったためです。そこで悩んだ結果、サブタイトルに「主要国の政治制度」と付けました。英米独仏日の五か国は執政制度として議院内閣制か大統領制を採用していますが、選挙制度を含め、いずれも全く同じではなく、歴史的、経路依存的に形成されてきています。このことについてなら全く知らないこともないだろうが、かといって良く知っているということもないだろうと考えた訳です。F 科目（導入）になった今年度も、基本的にはこの内容について講義することにしました。

滝浪：「Image Studies」を担当しました。F 科目（導入）は、グローバル環境のなかにおいて英語で学ぶことの意義と楽しさを学生に伝えることを目的としています。こう

した趣旨に鑑みて、2022 年度の「Image Studies」は世界的に大きな人気を博している日本のアニメーションを題材としながら、グローバルな視野のもとで、日本の大学に所属している私たちにとっては身近な日本アニメを検証することを目標としました。

2. 授業の進め方や英語の組み込み方、日本語・英語の使用割合について教えてください。

高橋：「法と政治の世界」が F 科目（導入）となるまでは、制度の概要と歴史的経緯の説明に加え、新聞記事を使ってその国が現在どのような問題に直面させられているかを検討していたので、日本の新聞の記事を減らし、そこに英字新聞の記事を入れていくことにしました。具体的には、今年度はニューヨーク・タイムズとワシントン・ポストの少し長めの記事を使っています。事前に配付し、制度についての説明と日本の新聞記事での問題の把握の後、英文記事の読解をすることにしました。数回に一回、授業の約半分の時間をとって学生に訳してもらっています。

滝浪：使用言語については、日本語と英語の比率を含めて検討しましたが、授業内で読解するリーディングの教材を英文とし、日本語で説明することにしました。また授業で論じられるアニメ作品も日本で制作されたものであり、日本語を使用言語としています。授業の各回では、特定のアニメ作品をテーマとし、リーディング課題はこの作品に関係する批評や著作としました。

授業の各回で扱われたアニメ作品は、程度の差こそあれ、学生にとって聞いたことがあるものが多かったと思います（ただし第二次世界大戦以前の作品を知っている学生は少なかったと思いますし、戦後の有名作品でも見たことのある学生は多くなかったと推測されます）。しかしこのように身近なアニメであっても、その作品が英語圏でどのような評価を得ているかを知っている学生はほとんどいません。そのため授業の冒頭で数十分をかけて、課題として指定した英文を読むことにしました。英文は作品評やアニメに関する概説書（場合によっては学術書）から選びましたが、いずれも高い読解力が要求される英文で書かれています。こうした難しい英文の理解を高めるために、学生に一文ずつ日本語訳をしてもらい、それにコメントを加えることで授業を進めました。

授業では続いて、同じく数十分間かけて、該当する週の授業で扱うアニメ作品の歴史的背景や文化的・社会的論点を講義形式で説明しました。先述したように、この説明も日本語で行いましたが、スライド資料は英語で作成するという工夫を加えました。「Image Studies」は F 科目（導入）として、グローバルな視野のもとで日本アニメについて論じる能力を得ることを目指しています。日本アニメは海外でも広く見られ、多くの批評や著作が書かれています。しかし、日本の大学生は有名作品であっても、英語タイトルすら知らない場合が多いのです。そのため、授業では日本語で講義を行いながらも、英語でもアニメ作品の基本情報を提示し、さらに歴史的背景やアニメ技術に関す

る基本用語も英語で示しました。日本アニメは高い芸術的達成を獲得し、第二次世界大戦や戦後大衆文化など、背景にある歴史的・社会的文脈とも複雑に絡まり合っています。こうした事象について英語で論じることができるようになるためには、高い英語力が要求されます。「Image Studies」1 科目のみで、この高い水準に達することは不可能ですが、この水準を目指す第一歩となるような授業を心がけました。

講義形式での説明の後、その週の授業のテーマである作品の抜粋を鑑賞し、時間の余裕があるときには、数名ごとにグループをつくり、ディスカッションをしてもらい、いくつかのグループには議論から得られた見解を発表してもらいました。このように授業内では日本語を主要言語として使用しましたが、課題として英文のリーディングが課せられ、授業内で提示されるスライド資料も英語で作成したため、授業全体のなかで英語が占めるウェートは低くありません。

3. 課題の出し方やフィードバック方法、学生の受講姿勢について教えてください。

高橋：特に課題として指定したわけではないのですが、例えばこれからイギリスの政治制度の授業になるという場合、事前にイギリスについてのレジュメや邦語記事と一緒に英字新聞記事も配付し、「最後にワン・センテンスずつ訳してもらうよ」と言っておくと、学生たちは（どのセンテンスが当たるか分からないからでしょうが）大体全訳を作ってきているようです。記事自体は比較的長めのものなので、半数ほどの学生に訳してもらうことになります。それを（日本についての英文記事も含め）五か国分行いました。時事なので、今焦点が当たっている言葉や概念もあります。例えばアメリカが南米からの移民を規制するために「タイトル 42」という手段を使っています。これは公衆衛生法の条項で、伝染病の疑いのある者は入国を拒否できるというものです。このような言葉はアメリカではよく知られているでしょうが、少なくとも日本ではそれほど一般的ではありませんので、こちらで補助説明を入れたり、軽く直すこともあります。科目設置趣旨にあったように、細かい語句の間違いなどをあげつらうことはせず、この訳語の方が分かりやすいと言う程度です。

とはいえ、実のところ学生たちは、かなり完成度の高い訳を作ってくれています。「もっと砕けた訳でいいのだよ」と私が言わなければいけないくらいでした。新聞記事を読む時は、普通は大体の内容が分かればいいので、いちいち単語に拘泥したりはしません。そのため大まかなところを前から訳し下ろす感じでいいと言っており、私が実践してみせたりしました。今年度で言えば、全訳を作っていなかった学生はいなかったのではないかと思います。最初は「訳せ」と言うと嫌がるだろうかと心配したのですが、それは完全に杞憂（きゆう）でした。

滝浪：先述したように、「Image Studies」では毎回の授業で英文リーディングの課題

を出しました。学生は予習をし、授業時に当てられた際には日本語訳を行います。教員はそれにコメントを入れることで英文の理解を深め、さらにはその英文が主題としているアニメ作品や歴史的背景についても補足しました。なお授業時での解説では、正しい英文読解のために必要な文法や単語の説明も行いましたが、細かな英文和訳にはこだわらず、大意をつかみながら、英文で理解する楽しみを伝えることを重視しました。

授業で読んだアニメ作品批評やアニメに関する著作は、例えば英語圏での大学生にとっても読み応えのあるもので、けっして簡単なものだと言えません。しかし、学生は意欲をもって予習し、授業内で当てられた際もよく答えてくれました。教員はフィードバックとして、授業内での英文解説時に口頭で、英文読解のためのポイントを強調しながら行いました。また英文読解とは直接的には関係ありませんが、アニメ作品鑑賞後のディスカッションの成果の発表時にも、学生の発言に対してコメントを加え、授業全体の進行を踏まえながら、アニメ史や背景となる社会的文脈のポイントをあらためて強調しました。

4. 言語系科目との違いについて、意識した点があれば教えてください。

高橋：スピーキングを別とすると、言語科目でも新聞記事などを活用しているかもしれません。違いがあるとすれば、どの記事を選択するかという点だと思います。やはり政治制度に全く無関係な記事、その国が直面させられている問題とは言えない記事を選ぶわけにはいきません。その国の政治制度や歴史的経緯についての知識があると、よりよく分かるという記事を選びました。随時、何故これが問題かと学生に尋ねたりしてもみました。英文記事を読むことと授業内容の連動を（わずかばかりですが）試みてみました。

滝浪：言語系科目との違いを意識し、外国語「を」学ぶというよりも、外国語「で」学ぶ授業とするように心がけました。そのため言語教育とは離れ、まずは授業全体を通して、日本アニメの歴史の全体像をつかみ、歴史的背景を含めた基本的論点を押さえることを重視しました。14 週からなる授業を通じて、第二次世界大戦以前から、戦中と戦後を経て、20 世紀後半のテレビの時代、さらにはより近年におけるアニメがグローバルな人気を獲得した時代まで追いました。また、こうしたアニメの歴史に加え、アニメが持つ政治的含意（とりわけ戦中のプロパガンダ映画）、ディズニーをはじめとする外国映画の影響、アニメ制作にかかわる技術といった、日本のアニメに関係する重要な論点にも光を当てました。

その上で、英語圏では日本アニメはどのように評価されているかという視点を導入し、外国語「で」学ぶことによって、より広い視野から授業のテーマを学ぶことができるように工夫しました。そのため、予習を中心に英語読解力が求められるものの、授業そのものは英語力が高くなくても理解できるものとなっています。むしろ授業で求めたものは、英語の高い読解能力以上に、難しい英文であっても理解しようと努力する意欲であ

り、授業ではこうした意欲を高めることに主眼を置きました。「Image Studies」は「学びの精神」科目として、この授業を通じて、学生が今後の専門科目のレポートや卒業論文・卒業制作に取りかかる際、外国語でも文献を調べ、自身で選んだテーマの洞察を深めるという姿勢を身に付けてもらうことを目標としました。

5. 授業運営上、苦労した点や課題について教えてください。

高橋：これは余り普遍性のない「苦労」ですが、まず何よりも、ある者が戦争を始めてしまったせいで、アメリカの新聞記事の、とりわけ国際面がウクライナ一色になってしまい、英独仏日についての記事が大幅にしわ寄せを食い、記事の選定に途方もない苦労をしました。それがしばらく続きそうなので頭の痛いところです。またこれもかなり個別的な問題ですが、ニューヨーク・タイムズやワシントン・ポストと契約していないので、無料で閲覧するには、時間的、回数的制限があり、多少悩まされたのも事実です。また、学生たちが完全な全訳を作ってきてしまうことも、これはこれで考え物だと思いました。間違っていてもいいし（評価には影響しないし）下手でもいいと言ってあるのですが、その場で訳すのはさすがに冒険だと思うようで、訳文を用意してしまっています。確かに勉強になっていてよいのですが、英語に慣れるという感じが薄れるようにも思います。かといって、事前に何も見せずに、いきなり今訳せというのもいささか乱暴な話で、学生がてんてこまいしているのを教壇から眺めているというのも性格が悪すぎます。その辺りの兼ね合いをどうすべきかは今のところまだ答えが出ていません。

滝浪：授業の反省点は、外国語「で」学ぶことの楽しさを味わってもらいたいという授業の意図が学生にどこまで伝えられたかに十分な自信を持てないところにあります。授業冒頭の英文読解パートは、英文理解を促進するためにどうしても英文和訳の授業に近くなってしまい、外国語「で」学ぶことの意義の発信が希薄になってしまったところがあります。また授業後半部の講義パートも、日本語中心の説明となってしまったため、アニメ研究としては大学の授業にふさわしい水準に達していたと考えていますが、外国語「で」学ぶことの楽しさを十分に伝えられていなかったのではないかと反省しています。

以上を踏まえて、今後の改善点として、学生には担当教員が用意した読解資料を読むだけでなく、学生自身で外国語の読解資料を探してくるという要素を取り入れる余地があるのではないかと思いました。これによって、履修者はより能動的に調べるという学問において不可欠な姿勢を体得することができると考えます。

6. その他、お気づきの点がありましたらお聞かせください。

高橋：学生にマイクを回していこうと思ったのですが、教室設備の関係上、ワイヤレス

マイクを使用するには、大きなスピーカーを持っていかなければならないことがわかり、マイクを使わず地声でやってもらうことになってしまいました。全く聞こえないということはないですし、マイクで派手に間違った訳を言うのも嫌かもしれないと思いましたが、マイクを回していくことができればいいなとは思いました。今後、授業運営や内容をどのように改善したらよいかという点については、現在のところ思案中ですが、このようなものでも何かご参考になることがあれば幸いに思っております。

滝浪：個別の授業をより魅力的なものにするという努力が必要であることは当然ですが、カリキュラム全体のなかで他の授業と有機的に連関させる必要もあると考えます。もとより外国語「で」学ぶことを習得するには、一つの授業だけでは不可能です。外国語で講義を行う発展的授業、外国語によるディスカッションやレポート作成に重点を置いた少人数の授業、さらには必ずしも外国語での授業というわけではありませんが、外国語での文献講読や調査が必須である研究に主眼を置いたゼミや論文指導などと有効に連携できる仕組みが構築できればと考えています。